



〒 399-0711 長野県塩尻市大字片丘字南唐沢 6342-4

TEL (0263)53-8802 FAX (0263)51-1290 E-mail : kikaku@edu-ctr.pref.nagano.jp

目次

「所長挨拶」…………… p.1

「調査研究事業の報告(調査研究Cチーム)」…………… p.2,3

「調査研究事業の報告(調査研究Dチーム)」…………… p.4

「調査研究事業の報告(調査研究Eチーム)」…………… p.5

所長挨拶

『個人と社会のWell-beingを目指して』

長野県総合教育センター所長 宮崎 潤

激動の令和4年度も、終わりを告げようとしています。総合教育センターの諸事業に対し、ご理解とご支援を頂きましたことに、厚くお礼申し上げます。

慶応大学の前野隆司教授は、ウェルビーイングの研究者の立場から見て、「主体的・対話的な深い学び」は、ウェルビーイングな学びに見えると言っています。幸せな人が持つ要素として、

- ①主体性(いやいやより主体的・自主的に行う)
- ②対話(自己開示した対話に基づく信頼関係の構築や多様な情報交換)
- ③深い学び(学び成長することは、新たな自分になっていく) をその理由としてあげています。

このことは、自分はどんどん成長して新しい自分になっていくのだというGrowth Mindという心の状態を作り出すからだ指摘しています。

今の学習指導要領が高等学校まで本格的に実施されて1年。それぞれの学校でその趣旨を生かした「個別最適な学び・協働的な学び」が推し進められ、探究的な深い学びの実現に向け、不断の努力がなされています。これらを支える『教員研修＝先生方の学び』はいかにあるべきか、私ども総合教育センターの大きな課題の一つとして取り組んでいます。昨年度から、「ベストミックス研修」として、参集研修とオンライン研修、ベテランと若手の世代を超えた研修、長年蓄積されたノウハウとICT利用など、二項対立でなく、それぞれの良いところを取り入れた研修を心がけてきました。

その一方、豊富なインターネット上の情報、蓄積されたオンデマンド研修など、今まで行われてきた研修を代替する情報源があふれつつあるのも事実です。

このような中、これからの研修はいかにあるべきかの私たちの到達点は、校内研修、センター研修を問わず、研修は「教室の子供たちの学びと相似形でなくてはならない」ということです。このことは、センターへ参集していただき、皆で研修する意義につながります。

長野県の次期教育振興計画の中にも、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実による“個人と社会のウェルビーイングの実現”という表現があります。

センターでの研修が先生方に広く開かれ、教員どうしの個別最適で協働的な学びの場となるよう、一層の努力を続け、「磨かん共に」の精神を一層ブラッシュアップしながら、先生方とともに長野県教育のために歩みを進めます。今後ともよろしく願います。

調査研究の目的

学習指導要領で求められている資質・能力の育成を目指し、各学校では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の観点から、学習活動の充実の方向性を改めて捉え直し、これらを一体的に充実させながら授業改善を図る取組が始まっています。

例えば、小学校4年生の音楽の授業では、子どもたちが、「こんな感じの祭りばやしにしたい」と思いや願いをもち、旋律づくりに没頭していました(図1)。

教師は、端末の楽譜アプリを用意して入力した音楽を再生できるようにしたり、五線譜を準備して手書きで旋律をつくり、つくった旋律を楽器で再現できるようにしたり、子どもが自分にとって最適な方法で音楽づくりをしていくことができるように準備していました。また、子どもが、音の上がり下がり、反復などによる旋律のつなげ方に気付いたり、音楽を形づくっている要素の変化によるよさや面白さを把握したりできるよう支援していました。さらに個々の気付きの意味を全員で比較・検討する場面を設けて、協働しながら学びを深くしていくことができるような支援を計画していました。

このように個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させていくために、私たち教師は、普段どのように思考・判断して授業づくりをしているのかを把握するため、本テーマを設定して調査研究を行いました。



図1

音階から音を選び、旋律をつくる端末のワークシートを使うM児

調査研究の内容

(1) 学習活動の充実の方向性を、学習者視点から捉え直す

○個別最適な学びとは、教師視点から整理した「指導の個別化」と、「学習の個性化」を、学習者視点から整理した概念のこと。

「指導の個別化」(教師が効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うこと)

「学習の個性化」(教師が子供一人一人に応じた学習活動や、学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が、学習が最適となるよう調整すること)

中央教育審議会答申(令和3年1月)には、上記のような記載が見られます。注目したいのは、今まで「教師視点から整理していたものを、学習者視点で捉え直す」というところです。

もとより承知のことであり、踏まえて実践している私たちですが、普段の授業づくりにおいては、とすると、図2のように、教師を主語に考えてしまうことがあります。その時の、手だてや支援の表現を見ると、指示や使役が並んでいることがあります。形成的な評価の内容が抽象的になったり、あいまいになったりすることもありそうです。

しかし、改めて子どもを主語にしてみると、同じ授業づくりでも、図3のように、驚きや感動を含む子どもの様々な受け止め方や、多様な思いや願い・問い、多様な追究(追求)の姿を、たくさん予想することができるのではないでしょう。

何も難しいことではありません。視点を教師から学習者に変えただけですが、答申ではその

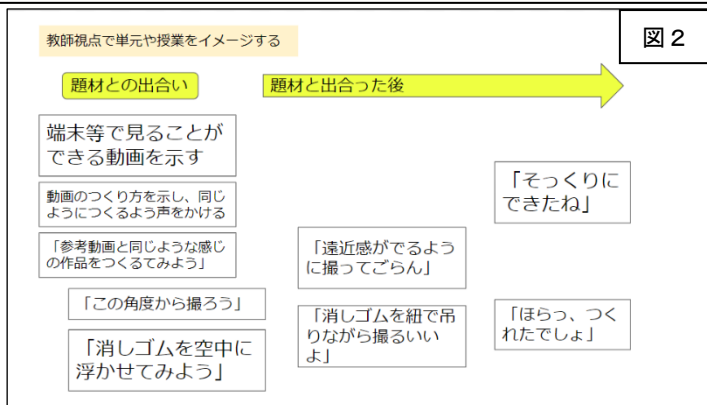


図2

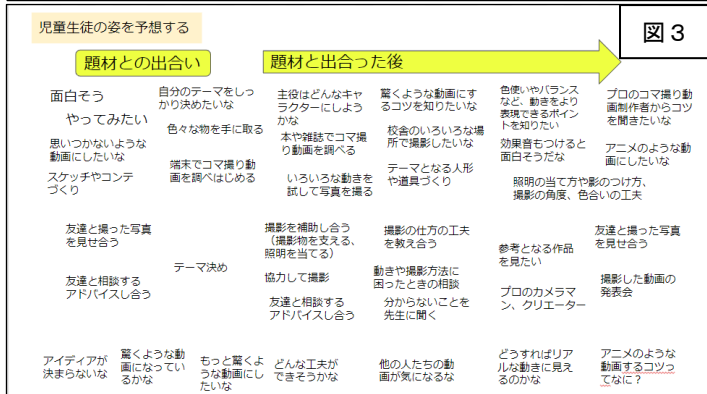


図3

ことの大切さを明言し、私たち教師に、改めてその実践を促していると考えます。

(2) 予想した子どもの姿を基に、子どもの授業に取り組む意識の流れを考える

視点を学習者に変えることは、授業改善に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実のための重要な要素ですが、必要十分条件ではありません。

学習者の視点で検討した図3のような資料を基に、養う資質・能力を加味しながら、授業や単元の全体像を把握することも必要です。

例えば、図3で予想した子どもの姿を、図4のように整理してみます。個々の子どもの意識、他者との関わりが生まれそうな意識、悩みや不安・課題意識などに分類してみると、子どもの意識の流れが見えてくることがあります。

興味や関心をもって個別に学習に取り組む(1A)→個や小さなグループで問いや悩みをもち(1B)→協働での学習で解決したり、深めたり(1C)する場面や学習形態が見えてきます。そのサイクルが単元の中で連続することも見えてきます(2A)。

子どもの意識の流れを踏まえるからこそ、個別での学習を充実させるのはどこか、協働して学習することで深めるのはどこかが、具体的なイメージを伴って明らかになりそうです。

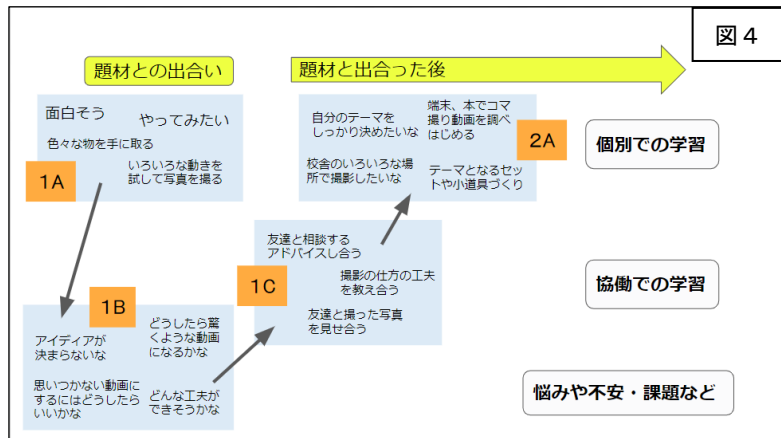


図4

(3) 子どもの授業に取り組む意識の流れを踏まえて、教師視点の手だてを組み入れる

図4で把握した、子どもの授業に取り組む意識の流れを探究のサイクルに乗せて表現したものが図5です。個別最適な学びが充実するところはどこか、協働的な学びが充実するところはどこかが明確になっていると、学習の過程で必要な教師の支援も具体的にイメージしやすくなることも期待できます。

冒頭の音楽の事例のように、端末で音を確認かめてすぐに入力できるソフトが、どの学習過程で必要になるかが見えてきます。教師が、子どもが必要なものを必要な時に提供できたのも、こうした背景があったからかもしれません。

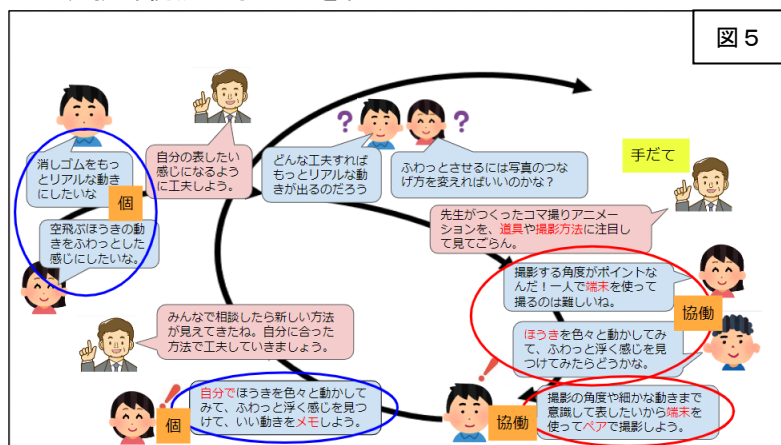


図5

まとめ

学習者視点で捉えること、捉えた意識をもとに、子どもの授業に取り組む意識の流れを把握すること、その上で改めて支援の方向や方法を検討すること…。従来から大事にしていたが意識せずに行っていたことを、例えば(1)～(3)のように、意識的に行い見える化することで、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させる実践が進みます。

しかしここで、気を付けたいことがあります。それは、このように整理したものは、あくまでもその時点で教師が暫定的に整理したものであって、学習者の学習が展開していけば変わりうるということです。この認識がないと、結局のところ教師が一度作ったものに最後まで縛られて、教師視点からの授業づくりから脱することが難しくなってしまいます。

来年度は、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させて資質・能力の育成に資する授業改善についての事例を集め、その実践に取り組む際の教師の思考や判断にも光を当てて調査研究をしていきたいと考えています。

【調査研究報告 調査研究 D チーム】

『令和の日本型学校教育』を担う教師の学びと研修の在り方について

経過

個別最適な学び・協働的な学び・GIGA スクール構想の実現・学習指導要領の着実な実施といった令和の日本型学校教育のあるべき姿を念頭に置き、主に受講者のふりかえりから、現在の研修における課題を見出し、よりよい研修講座を運営できるように調査研究を進めてきました。

目的

指定研修の受講者のセルフチェックシートの分析やふりかえりの内容等を所内で共有し、受講者の課題に寄り添った研修講座の構築運営を行っていくことを目指しました。

I セルフチェックシートを通して

初任者研修やキャリアアップ研修の中で、受講者のセルフチェックシートを分析したところ、下記のような「**地域コミュニティの拠点としての学校づくり**」の項目に課題があると答えた人が多くいました。

- ① 学習環境を整え、個別支援を充実させるために、**教育活動に地域の方の力を取り入れている**。
- ② 地域の人材・企業等の協力による**地域学習を教科等の授業に位置付け**、学習を展開している。
- ③ 年間指導計画や行事計画等をもとに見通しをもち、教科会や学年会で**地域の教育資源の活用を提案**している。

上記に関連した内容として、今年度、総合教育センターでは、以下のような講座を運営しました。

- 地元の探索、見学（短歌館・遺跡の発掘・バイオマス発電所・博物館 等）
- 地域素材の教材化（石ころ・登山） ○天体観測、火山や地層 ○郷土食づくり（ぶどうジュース等）
- 人材育成、司法書士の講師 ○社協の方との取り組み ○地域の防災マップ作り 等

その他に、義務初任者研修で講義「地域と共に歩む学校」、義務キャリアアップ研修Ⅱで講義「なぜ今、学校・地域・家庭の連携なのか」など、セルフチェックシートの分析をもとに、受講者の課題の克服につながる研修講座を計画しました。

II 高等学校指定研修における ICT の活用

【具体的取組】

- ・初任者研修のオンデマンド研修において、スプレッドシートを活用することで、受講者同士が同じ場所・時間を共有しなくても双方向の情報共有が可能
- ・初任者研修において、Google Classroom のみを使用したオンライン研修を実施。Meet を用いて 11 グループの研究協議を行い、情報共有には JamBoard、スプレッドシート、スライド、Forms を活用
- ・キャリアアップ研修Ⅱのセンター講堂での参集研修において、受講者のタブレット及びセンターの Wi-Fi 環境を活用し、Google Classroom (Meet、JamBoard、スライド、Forms) でのグループ協議を実施

【成果（受講者の声から）】

- ・**生徒の立場で Google Classroom を使用することができ、授業で使用する上で大変参考になった。**
- ・**スプレッドシートを活用した振り返りは様々な考え方に触れることができたため、今後の教育活動においてスプレッドシートの共同編集も活用していきたい。**
- ・**Meetを使用した研修スタイルが授業や職員研修でもできる可能性を感じた。**スプレッドシート、JamBoard、スライド等で共同編集によってできる事はたくさんありそうで、**授業でもたくさん活用していけるのではないかと感じた。**
- ・Google を効果的に使用しながら、様々な先生方から**多くの学びがあり、とても楽しかったです。**

成果

研修講座のふりかえり等から受講者の課題や学びの多い研修内容を分析し、令和5年度の研修の講座構築を進めてまいりました。また、今年度は ICT を活用し、スモールステップで複数のコンテンツを作成し、受講者が各校での授業にすぐに活かせる内容となるよう意識して講座運営をしてまいりました。

課題

令和5年度は、より学びの多い研修講座の運営をするとともに、校内研修の充実を目指し、受講者が講座の内容を校内研修につなげやすいよう研究を進めたいと考えております。また、受講者が ICT を活用し情報を共有、データベース化ができるようさらに研究を進めてまいります。

子ども理解を深めるために～教職員の子ども理解を支援する～

【調査研究の目的】

今年度の長野県の調査において、発達障がいの診断を受けている児童・生徒は増加し、小・中学校・高等学校の全てで過去最多になっていることが明らかになった。クラスの中で「気になる子」は「困っている子」であり、児童生徒の困っている背景から支援を検討し、チーム学校で実施していく必要がある。今年度は対象を高校に絞って調査研究をし、生徒の困っている背景から支援を考えるきっかけとなるような校内研修用の動画を作成することとした。

【調査研究の内容】

◆各校の取組を視察・調査

<箕輪進修高等学校>

通級による指導の取組を中心に授業を参観。生徒一人一人の丁寧な実態把握や情報の共有をもとに、教職員がチームで支援を行う学校体制が構築されていた。自立活動の視点で生徒の願いや課題を捉えて目標を設定し、自己理解を深めながら、将来の自立と社会参加に向けて必要となる力を育成していく通級による指導について学ばせていただいた。

<松本筑摩高等学校>

キャリア教育の一環として行われているソーシャルスキルトレーニングを参観。安心して学校に通い、納得して自分の進路に踏み出していけるよう、「挨拶する」「話を聴く」「親しく話せる」などのソーシャルスキルトレーニングを年間計画に位置付けて継続的に実践していた。また、教職員の共通理解のもと、教師がカウンセリングマインドをもって生徒とかかわり、情報の視覚化等による支援が当たり前のこととして実践されていることを学ばせていただいた。

<エクセラン高等学校>

高校生活に対して不安を抱えていた生徒が「この学校ならできるかも」という気持ちで生活できる状況づくりをすることで、安心し意欲的に学ぶ姿につながっている様子を参観。相談体制を充実させ、丁寧な生徒理解と情報共有をすることで、個々に最大限配慮し、生徒たちの「これまでできなかったことにチャレンジしたい!」という気持ちを支える支援が学校全体で実践され、生徒の自信につながっていることを学ばせていただいた。

<塩尻志学館高等学校>

全ての生徒がわかる・できる授業のユニバーサルデザイン化を目指した取組を参観。生徒と教師それぞれの授業中に気になることを調査した上で、生徒が求めている支援や教師側の課題について検討し、情報の視覚化、刺激量の調整等の支援を学校全体で取り組んでいることを学ばせていただいた。

支援を考えるきっかけとなるような動画を作成し、校内研修で活用してもらおう!



気になる生徒の支援や対応について、約5分で視聴できる動画を作成中。研修等でご活用ください。※4月にホームページに掲載予定

◆動画の作成

ちょこっと紹介!

クラスの中で気になる生徒の支援・対応、ここが知りたい
～高等学校「導入」編～

長野県総合教育センター 特別支援教育部

高等学校の特別な支援を必要とする生徒にかかわる現状

○高校で発達障がいの診断を受けている生徒の在籍率は4.14% (県教委のR4.9月調査結果より)

○中学校の特別支援学級に在籍していた生徒の75%が高等学校に進学

授業中、困っている生徒の姿

「やる気の問題!」

「授業中、困っている生徒の姿」

「やる気の問題!」

「授業中、困っている生徒の姿」

導入・授業前・授業中の3回シリーズ

見方を変えてみると・・・

気になる生徒は、困っている生徒

周囲の理解や適切な支援等、学習環境を整える

特性による支援を 持っている能力が 不登校等の二次的

やわらげる 十分発揮される な問題を防ぐ

生徒の立場に立って「わかる伝え方」を考える

適切な情報の量 分かりやすい言葉 視覚的に示す 後で確認できる

ミニワークで意見交換

ミニワーク

学習環境をチェックし、見直してみましょう。

チェックリスト

- 黒板まわりに余計な掲示物がない
- 机や備品が整然と並んでいる
- 黒板がきれいになっている
- 必要な情報がわかりやすく掲示

生徒の立場を知る疑似体験

※動画の文書等は変更する場合があります